

それとも哀れむだろうか。

眠れぬ夜はもうずっと続いていた。

名古屋へ同行しろと言われたのは出発の前夜だった。

唐突だったが荷物を殆ど持たない響希は準備に悩む事もなかった。ヤマトも特に荷物など用意する様子がなかった。タミナルを使つての日帰りかせいぜい一泊だと思つていたが、乗せられた車の中であちらに一週間程滞在するのだと聞かされた。

「そんなに？　つていうか、車で行くの？」

「タミナルはまだ復旧していない。地下は安全確認中で列車を走らせるには少し早いが車は通れる」

荒れて悪魔も出る地上を行くより地下のが安全で便利だ。そう説明した後はヤマトは無言だった。響希も特に言うべき事があるわけではないので黙っていた。

数台の車が連なつて名古屋へ向かった。地下は地上に比べれば損傷は少ないようだったが、それでもところどころ線路が歪んだりしているようだ。前夜もやはり寝不足で体調が万全とはとても言えない響希は、路面の悪い

地下を走り続けているうちに気分が悪くなつてきた。

（車酔いかな……ええと、景色を見るといいんだっけ？）

あいにく窓の外は延々と同じ壁が続くだけだ。それでもただ前を向いているよりは気が紛れるかもしれないと窓の向こうを見つめる。だがやはり調子は良くならず吐き気がひどくなつてきた。動くと余計にひどくなりそうで顔を動かす気にもなれない。

「やめておけ。何もないところを凝視しては余計に気分が悪くなる」

薄暗い地下の風景が延々と続いている視界が急に翳つた。ヤマトの手だと気づいた時には両目を完全に覆われている。車の中で出来るだけ身を離して座っていたのにいつのまにこんなに近くにいたのだろう。振り向いてみたが手はそのままなので何も見えないままだ。

「吐くのなら車を止めさせるが？」

微かに首を振る。

「そこまでひどくないよ。多分、ちよつと休めば治るから」

「ならばこのまま目を閉じていろ。何も見ないほうが楽になる」

頷いて目を閉じた。ヤマトの手は目元に当てられたまままだ。

（ちよつと楽になったかも）

癒やしのスキルを使われたわけではないが、それに似た感覚を覚えた。多分血の気が引いていたところに感じた指の温かさのせいだろう。

人前でヤマトに触れられたのはこれが初めてだった。寝室での仄暗い熱を持った手のひらではない、ただ温かいだけの指先は意外なくらい響希を落ちつかせる。気分が良くなるまで少し瞼を閉じているだけのつもりがそのまま眠りこんでしまった。

目覚めた時にはもう目を覆う手のひらは除けられていた。顔を上げようとして彼は自分がヤマトの肩に凭れかかっていたのだと気づく。

「ごめん……あつ」

謝ろうとして慌てて口を噤む。ヤマトもまた響希の頭に頭を預けるように目を閉じていたからだ。

そつと視線だけ向けてヤマトの様子を窺った。毎晩同じ部屋で寝ているのに寝顔は殆ど見た事がない。暗い部屋の中では向こうのベッドで眠るヤマトの顔など見えしないし、響希はいつもヤマトに背を向け身を縮めるようにして目を瞑っていたから。

意思の強い、鋭い瞳が隠されているからか彼の寝顔は思いのほか幼く見えた。暫くの間響希は彼に見入っていた。そうしてもう一度目を閉じ、次に開けた時には名古屋に着いていた。降りるぞと急かされて頷きながら、何

もしていないのにヤマトの側でぐっすり眠っていられた事を不思議に思った。

どうやらヤマトは名古屋地方の有力者達との面会の為に訪れたらしい。多くの犠牲者を出したあの一週間で、その後の実力主義の到来を経て社会での権力分布にも大きな変化があった。ジブスの……ヤマトの優位を確かにする為にも各地の有力者を自らの手駒としておきたいのだろう。

名古屋でも響希はヤマトについて歩くだけだった。自分がいても邪魔になる場のほうが多いだろうにどうして同行させられたのか解らない。食事以外は殆ど部屋で待たされていたが、ここで用意された部屋は二階で窓があり、すぐ外に庭の景色が見られるのが新鮮だった。木々と高い塀が目隠しになってその外の様子は窺えず、名古屋のどの辺りなのかも解らない。

だが美しい景色があるからといって呑気に楽しんでばかりはいられない。どうせ一週間しか滞在しないからと部屋には清掃などで一切人を入れないようにとヤマトは部下に厳命していた。そうして誰も来ないのいいことに響希をベッドに繋いだまま出かけてしまう。何も出来ないのを知って戻った時には、

「いい子にしていたか？」

などと嘯いて響希の反応を楽しんでいた。